HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	よみがえったモノとコト、よみがえらせた物と者（T.Yamagishi, “‘Items and Matters’ That have been Resurrected and ‘Things and People’ That have Implemented Them.”）
Author(s)	山岸, 嵩
Description	ポーランドのアイヌ研究者　ピウスツキの仕事 : 白老における記念碑の序幕に寄せて. 2013年10月20日. 北海道大学学術交流会館. 札幌市 主催：北海道ポーランド文化協会, 北海道大学スラブ研究センター. 共催：グローバルCOE プログラム「境界研究の拠点形成」. 協力 : 駐日ポーランド大使館, ポーランド広報文化センター
Relation	「ポーランドのアイヌ研究者　ピウスツキの仕事 : 白老における記念碑の序幕に寄せて」研究会報告集
Issue Date	2013-10-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/53482
Type	conference paper
File Information	47Yamagishi.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

よみがえったモノとコト、よみがえらせた物と者

山岸 嵩

『ユーカラ・沈黙の80年～樺太アイヌ蠟管秘話～』(NHK総合テレビ「NHK特集」1984年放映)、『カラフト・アイヌ望郷の声』(NHK教育テレビ「ETV特集」1985年放映)、山岸嵩「よみがえった《ロウ管》」(木下順二ほか監修『新訂中学国語』2: 199–215、教育出版、1987 所収)の制作過程と放映後の声を通して裏話的に……

1．話の端緒

わたしが初めて蠟管の存在とその再生作業の試みの話を聴いたのは、フリーの科学読物作家本田ニラム(本名藤野重光)さんからだった。かれは当時ある科学番組の構成に携わっていたのだが、それの担当部局である科学番組部ではなく、学校放送部のわたしに「これはお前の仕事だ」とわざわざ知らせに来てくれた。科学雑誌の用で立ち寄った北海道大学で、応用電気研究所の伊福部達さんから聞いたのだという。「録音したのは祖国の独立運動をしていたポーランド人学生で、レーニンの兄なんかと一緒にロシア皇帝暗殺事件に加わり、サハリンに流刑された人らしい」と言う。おそらくそのあたりがわたし向きだとニラムさんは判断したのだろうが、かれも正確な名前は知らなかった。しかし、独立と革命の運動に敗れた流刑者が、どういう経緯でか流刑地で、当時では家一軒買えるほど高価な蠟管レコードに、カラフト・アイヌのユーカラを録音し、それがポーランドに80年間眠っていた末に、日本の音響工学の粋を尽くして再生されるという話は、なんとも刺激的だった。ニラムさんはこう付け加えた「伊福部さんはまだ若い助教授だが魅力的な研究者だ。作曲家伊福部昭の甥だけに、耳がよい」。

早速伊福部さんに電話したところ、これは北方文化研究施設の黒田信一郎、井上紘一の両人に依頼された仕事だから、まずはそちらをとおせと言われ、両氏との付き合いが始まった。互いに何度か訪問するなかで、お二人にピウスツキその人の名前の正確なつづりと発音に始まり、事柄のおおよそと、さまざまな問題点を聴かされた。二人ともそれらが解明されていく経緯が番組化されることに積極的だった。蠟管はすでに日本に向けて発送される段階になっており、わたしは即座にNHK特集として特別番組に提案することに決めた。この番組枠――略称してN特――は提案制で、どの部からでも提案することができ、通れば比較的長期の制作期間と、割と潤沢な予算が与えられるのだ。

しかし、そのためには最低二つの条件が必要だった。第一は蠟管再生が技術的に困難でも成功する可能性が高いこと。第二はピウスツキその人の魅力と、かれが残したものを発掘することに意味があり、再生に値するということだった。わたしは三氏や関連する人々に接触し、確信に近い感触を得て提案し、それは通った。

2．まずモノありき

このプロジェクトの成否は、まず第一に脆い上にカビだらけの蠟管の再生にあった。番組としては、もし再生に成功しなくても、その過程自体がドラマチックであれば必ずしも作品と

して成り立たないわけではない。そういうドキュメンタリー番組も民放 NHK を通じ少なからずある。

しかし、わたしはこの番組の成否の第一を、まず日本の音声工学や光工学の技術にかけた。それでなくては、わざわざポーランドから空輸してくる意味がないではないか。

さいわい伊福部研究室は熱気に満ちていた。伊福部さんは学生や院生だけでなく、さまざまなところで働いている卒業生や、まったく違った分野の研究者にも声をかけて、かなりオープンな雰囲気で進めていた。とはいえ北大全体やその中の応用電気研の中で、他の研究室にどう受け止められていたかは定かではなかった。閑静な研究の場に、場違いな人間がどやどやと撮影機材などを持ち込み、時に何日も粘ったりしたわけだから、少なくともわたしたちは歓迎されるはずはないのだが、格別の苦情も受けなかった。

それには朝倉利光さんの存在があったようだ。同じ応用電気研の教授である朝倉さんは若い伊福部さんの仕事をじっと見つめ、後ろから助けていたようだった。黒田、井上の両氏に次いで、このプロジェクトの中心的推進者であった小樽商科大学の和田完さんは、後になってこう記している。「朝倉との出会いは、蠟管再生のための技術チームの編成への展望が開けただけでなく、朝倉の政治力による多額の資金調達とマスコミへの宣伝工作の開始への弾みをつけられるのである」(「ブロニスワフ・ピウスツキの古蠟管――黒田信一郎へのレクイエム――」(小樽商科大学言語センター『Language Studies』1994)。何のことはない、わたしたちの方が乗せられたわけでもあったのだ。それかあらぬか、朝倉さんにはずいぶんと迷惑をかけたが、一度も叱られも嫌な顔もされず、ご自分の研究室をわたしたちの機材置き場として使わせてくれた。

和田さんは提案の段階で NHK に黒田さんと共に訪ねてこられて、万が一蠟管再生がうまくいかなかった時の場合として、自宅に保管している針金式の録音機にユーカラが録音されているはずだから、それを再生して代用することもできると、申し出てくれたことがあった。彼のお父さんが戦前カラフトで開業医をしていて、アイヌなど原住民の骨格標本を集める傍ら、そんなこともしたのだという。針金式の録音機とは見たことも聞いたこともないし、和田さんのお父さんの収集品には興味がわいた。しかし、それを初めから蠟管再生失敗時の代案としておくという考えは問題だった。この番組では蠟管再生の失敗は同時に番組自体の失敗なのだ。百歩譲って次善の策を考えておくのはいいとしても、スタート前に彌縫策を検討するというのはあまりに敗北主義だ。もし成功しなかったなら、やはりなぜそうなったかの中にまずはドラマを求めるしかない。わたしは率直にその考えを述べ、「針金式録音の再生はその後で第二弾としてやりませんか」と申し上げた。しかし、せっかくの好意を彌縫策といわれ、和田さんはいたく立腹され、蠟管の番組が終わった後も、ほかの話は持ち込まれたが、二度とお父上の遺品の話はされなかった。ちなみにほかの話というのは、明治時代に日本からポーランドへ持ち込まれた相当数の浮世絵が、彼の地で見つかったというものだった。日本から多数の陶磁器が送られたとき、その詰め物として厚手の和紙に刷られた浮世絵が使われたのだという。面白そうだったが、わたしはすでに転職が決まっていたので同僚を紹介したのだが、残念ながらこれは番組化されなかった。

このほかにも書ききれないさまざまなことはあったが、まずはモノの方――蠟管再生の方――は目途が立って、次はヒトの方だった。

3. そしてヒト
――隠れていた人と集まった人――

ヒトといった場合、ここでは大きく二分される。蠟管に吹き込んだ側の人とその再生に関わり聴き取る側の人だ。そして、そのそれぞれはさらに現地住民およびその縁故者と、その訪問者や研究者とに二分される。

その中心にいるのがブロニスワフ・ピウスツキであることは言うまでもない。

その名を初めて聞いたとき、わたしはまったく初耳だったのだが、なんとなく堺利彦のものを以前に読んでいたとき、似たような名と境遇

の人に堺が触れていたような気がして、全集を調べてみた。案の定『平民新聞』の発行停止処分後に出した家庭婦人向け雑誌に、珍客ピルスードスキの訪問を受けて、楽しい時を過ごしたという随筆を載せていた。通じる言葉は互いに不得手な英語ではあったが、同じ人間、同じ同志として実に愉快な一日を持ったという。堺利彦は戦前の社会主義者の中で、わたしが最も敬愛している人だ。その文と井上さんに頂いた現地少数民族の子供たちの中でほほえんでいるピウスツキの写真をながめ、まだ何も知らぬかれを好きになり、なんとしてもこの番組を成功させようと思った。

そんなわたしに次々と知識を与えてくれたのは黒田さんと井上さんだった。井上さんはピウスツキその人の生涯や業績の追跡だけではなく、彼の縁者をヨーロッパ、アメリカ、日本国内に探し、北海道と横浜に遺族がいることをつきとめた。カラフト時代の妻チュフサンマとの間の息子と娘の遺族である。娘大谷キヨさんの方は比較的早く居場所がわかった。戦後カラフトから引き上げてきて結婚し三人の娘をもうけ、まだ健在で三人の娘も北海道でそれぞれ家庭を持っているという。

早速取材をしようとして、問題が起こった。キヨさんは取材どころか会うことすら頑強に拒否しているというのだ。自分たちを捨てた父のことなど話すのも嫌だと言われているらしい。事情はどうあれ、その後盲目になった母と共に残された子としては、当然の感情であろう。さらにそれに民族差別の問題がからむ。きわめて難しい問題だ。いずれにせよ拙速主義は絶対に採らないことを井上さんと話し合った。

ところがここに信じられない事件が起こされてしまった。どこから話を嗅ぎつけたか、同じ NHK の報道のディレクターが、わたしのところに来て番組のことを聴き、ピウスツキの遺族のことなども尋ねた。わたしは事情を話し、決して無理な取材をしないようにと念を押し、かれは了解して帰っていった。にもかかわらず、とんでもない映像がニュースで流れたのだ。入院している病院にいきなりカメラが入っていき、必死に逃げまわるキヨさんを追いかけまわしたのだ。

仰天したわたしは件のディレクターを探した。見つけたら多分ぶん殴っていただろう。見つからなかったが、かれの反対にもかかわらず、かれの上司がかまうものかやっちゃえと強行したらしいことが分かった。そこでわたしはこちらも上の方と、あまりあてにならないが労組にも話して、正式に問題化することにした。しかし、結果は無残だった。上司も厳重抗議とかを形はやったのだろうが、報道からは自己批判の言葉の一片もなかったのだ。

そもそも NHK には華の芸能、鬼の報道、仏の教育という言葉がある。番組制作の現業三部門を端的に言い表したものだという。いつごろできたものか知らないが、華の芸能はともかく、鬼の報道と仏の教育には注釈が要る。共に局内での力関係、それも上層部のそれであって、対権力となれば教育もたいしたことないが、報道にいたっては、常に永田町あたりの閻魔様ににらまれないかとびくびくしている青鬼なのだ。そんな報道に言うべきことも言えないのだから、仏が教育への蔑称語であることは言うまでもない。

これ以上荒立てると番組が作りにくくなると暗に脅しすかされ、涙を飲んだのだからわたしも仏だったが、ともかく外から見れば、報道であろうと教育であろうと同じ NHK である。キヨさんは面会謝絶の入院中なので、キヨさんの娘さんたちにわたしが謝ってまわるしかない。まず、住所の分かった次女のナミさんを北海道大樹町の郊外にたずねた。しかし恐れていたとおり、やはり門前払いだった。無理もないと感じつつ、本来なら出演交渉のために訪ねる予定だったお宅の前で、ぐずぐずしていたわたしは終バスを逃してしまった。郊外というより山中の別の村というほど離れていて、とても荷物を持って歩いて帰れる距離ではない。もちろん公衆電話などない。仕方なく、母屋から遠く離れた製材か何かの仕事小屋の軒下を無断で借りて、野宿をすることにした。暗くなった頃わたしは一人の青年に起こされた。両親が話だけは聞くと言っていると告げる。息子さんだった。それからの数時間、初対面だったが、わたしたちは互いに率直に話し、尋ね、聴き入った。ナミさんは以後の取材も許されただけでなく、

母はまだ無理だが姉妹たちにも伝えておくと言われた。息子さん――ピウスツキの曾孫――は、深夜大樹駅近くの旅館まで車で送ってくれた。

このようにしてピウスツキの遺族については、娘の方はご本人は無理だったが、その子供たちとは連絡が取れた。間もなくこれも井上さんの尽力によって、息子木村助造の未亡人とその子和保さんとも連絡が取れ、取材できた。

次は録音機に吹き込んだ者の方だが、これは年齢的にいってまず無理なので、それを聴き意味を取れる者たちとなる。これは二風谷の萱野茂さんたちに協力していただいたが、聴き取れる者はいなかった。しかし、カラフト・アイヌ語研究が専門の北海道大学の村崎恭子さんの尽力で、彼女のインフォーマント金谷フサさんの記憶を頼りに探っていき、蠟管から再生されたアイヌ語の意味をはっき聴き取った浅井タケさんにたどり着くことができた。そしてさらにそこで聞いた話から、吹き込まれた声に祖母塚田ヌサラケマのそれを聴き取った遺族の和江さんにめぐり会え、彼女たちはそれぞれ番組の二つのクライマックスシーンを生み出してくれた。

戦前の樺太に遺族を訪ねた人も、井上さんの尽力で何人か分かり、ギリヤーク（現ニヴフ）語の研究者服部健さんや、実業家の能仲文夫さんなど健在の方々にはお会いして、当時の樺太の様子や、妻チュフサンマの印象などを聴いただけでなく、貴重な写真や著書などを借りることができた。

次なる人はピウスツキやアイヌなどの少数民族やその言語や文化を研究する学者たちだった。

これは北海道大学の助教授と助手では肩書き不十分とみた黒田さんが、自分も北大と同時に兼任していた大阪の国立民族学博物館の教授加藤九祚さんをプロジェクトの頭に持ってきて、その名で呼びかけたのが利いたか、文化人類学や言語学にとどまらず、実にさまざまな領域から、またプロジェクトが国際を掲げ、実際にも国際的だったので、蠟管を保管していたポーランド、ポズナンのアダム・ミツケヴィチ大学の教授マイェヴィチさんを先頭に、西欧諸国から少なからざる研究者があつまった。その中には日本語が堪能なひともいて、二作目の『カラフト・アイヌ望郷の声』では、デンマーク出身で香港の大学で教えているというキーステンさんには、番組の狂言回しまでお願いした。もちろん相方には、これは十分に芝居っ気のあった黒田さんを配したうえではあったが。

キーステンさんといえば、余談になるがのちに転職したわたしは、ポーランドのクラクフで、偶然共同で司会をやらされたことがあったが、ポーランド語どころか英語も怪しいわたしは、そこでもずいぶんと助けていただいた。

黒田さんの芝居っ気といえば、これは余談でなく、蠟管から初めて明瞭な日本語が取り出されたときの笑顔と声が忘れられない。札幌での何回めかの撮影の最中、再生作業に取り組んでいた伊福部さんから、蠟管から日本語が聞こえたという知らせが来た。急いで駆けつけたら、はっきりと「私はピルスツキさんの蓄音器を借りまして、ただ今、日本の謡をここに吹き込みます」と聞こえる。わたしは早速、おもしろいものが出てきたからちょっと来てと黒田さんに電話して、やってくる彼を撮るようカメラマンたちに言った。スーツに着替えた黒田さんが満面の笑みを抑えて、もっともらしい顔で飛び込んできたシーンは、番組にそのまま生かされたとおりだが、じつは、あたかも初耳のような笑顔で部屋に駆けつけてきた黒田さんは、当然のことながら疾うに伊福部さんから報せを受けていて、すでに聴いていたのだ。

しかし、これは決して黒田さんの芝居っ気のなせる技ではなかったろう。蠟管から言葉がはっきり取り出され、しかも出てきた言葉が、この蠟管がピウスツキのものだということを証明してくれたのだ。いいかげんな物を持ってきて、ピウスツキにこじつけて、できもしないことをやっているのではないか、という陰口がなかったわけではない。そんなものはこの一声で吹き飛んでしまうのだ。わたしはこの声を聴いたとき、これでこの番組は番組になるぞと心の中で快哉を叫んだが、黒田さんのそれはもっと大きかったに違いない。だから頼まれれば何度でも心から微笑み、分かっていても「何か出てきたんですってねえ」と言いながら飛び込んで

こられたのだ。やらせであっても、決してやらされではなく、黒田さんは飛び込んできたのだ。このプロジェクトの看板には加藤さんの名があっても、実際上の責任者は黒田さんだった。番組制作上の自分に置き換えるまでもなく、わたしははっきりとそう感じた。

こうやって、ようよう番組はできあがったのだが、思い返せば数え切れない方々にお世話になった。せっかくの好意や協力を無にしてしまったものもある。ピウスツキが東京に来たとき泊った銀座箱館屋の主人信大蔵の子孫である俳優信欣三さんや、蓄音器博物館と言えそうなほどの機器を見せてくれた音声機器会社の資料室の方々には、せっかくロケに協力していただきながら、時間と構成の都合で、ついにまったく生かすことができず、謝るしかなかった。今考えても申し訳なく思う。

なんとも残念だったのは、ピウスツキの娘キヨさんに終に番組に出ていただけなかったことだった。じつは娘のナミさんから、母がもう長いことなさそうだから今のうちに入院先で撮影してくれと連絡があり、急いで駆けつけ撮影はしたのだ。が、技術スタッフの一人が不注意ミスで消してしまったのである。かれは、蠟管のトゥスクルの声を聴いていた和江さんが、突然「ばばの声だ」と叫んで泣き出したクライマックスシーンでも、不注意ミスで音声をひどい状態で収録してしまっていた。音が命の番組なので音声係は緊張し、異様な雰囲気にカメラマンもさりげなく、しかし必死の面持ちで二人とも最善を尽くしたのにである。そのときは、もう一度あの場面をやってくれるように頼んでくれと言われ、呆れてものも言えなかったが、今度は上司にはどうか報告しないでくれと手を合わされた。キヨさんが仏様になられたからか、やはりこちらが仏の教育だったからか。

霊柩車に乗せられて遠く去っていく最後のカットだけが、なぜか消去を免れ残っていた。それを見ながらわたしは、わたしなどの想像できないほど辛かったであろうキヨさんの生涯に改めて思いを馳せた。娘キヨさんは今ごろ天国で、まだ母の胎内にいるとき別れた初対面の父ピウスキに告げているのだろうか、孫たちがなんと言おうと、自分は命をかけてもあなたのことなどしゃべりたくなかったのだ……と。

NHK の内側ではいろいろと悶着があったけど、外の方々には本当にお世話になり、そのなかにはすでに他界された者も少なくない。今までに名前を出した中だけでも、本田さん、黒田さん、和田さん、能仲さん、金谷フサさん、浅井タケさん、信欣三さんがそうだ。もしあの世でキヨさんがまだ道に迷っていたとしたら、この人たちは彼女を間違いなくピウスツキの所に案内してくれるだろう。それにしても、かく名を連ねたこの故人たちは、なんと役者揃いだったことだろう。

浅井さん金谷さんは先祖代々の天性の演技者だったし、明治維新の立役者の一人榎本武揚の配下で函館戦争を戦いながら生き延び、銀座にバーを開いた信大蔵の孫の信さんは人も知る新劇の名優だった。能仲さんは話せば名の通り能弁で、樺太探訪記はしばしば筆は滑っても、まさにすべるがごとく活劇調だったし、本田さんは動物をしゃべらせたら右に出るものがない脚本家で、その昔は演劇文化工作隊などを組み、後に浅利慶太等と劇団四季を創設した日下武史などと北海道の樽前山麓あたりをうろついたこともあったらしい。その辺は定かではないが、彼らがあだ名で呼び合っていたことは確かだ。黒田さんの芝居っ気と和田さんの男前は、教壇などより舞台に立たせてみたいほどだった。

この人たちが生きていて、あのポーランド映画の巨匠アンジェイ・ワイダに会っていたらどうだっただろう。この番組が機縁でわたしはポーランドのクラクフで彼に逢って話をした――と言ってもロシア語が堪能な井上さんと埼玉大学の澤田和彦さんの通訳で――が、彼がわたしなどではなくこの人たちと会っていたならば、彼はピウスツキ一族の数奇ともいえる生涯を、あの名作『地下水道』や『灰とダイヤモンド』を凌ぐ、壮大な映画へと想い描いたのではなかろうかと思えてならない。

最後は、こうやって多くの人の力で出来上がり放映されたものが、どう受け止められたか、視聴した人々の声にふれて終わりたい。

４．視聴した大人、させられた中学生、高校生、大学生の声から

幸いにして放送直後から数多い感想が寄せられた。そのほとんどが番組に出ていた者や出来事の推移に感情移入していて、涙を流した人も少なくなく、ネガティブな声はまずなかった。特徴的なのは、初めは蠟管の再生がはたしてうまくいくか、という技術的興味で見始め、次第に歴史的な出来事や人間的な問題に関心が移っていったという声がかなりあったことだった。視聴率も 10 パーセント台で、プライムタイムの硬い番組としてはまあまあだった。専門家の評価も悪くなく、放送批評懇談会からは、1984年6月に放映されたものの中で最も優れた番組として月間ギャラクシー賞なるものをいただき、NHK の名作百選の中に選ばれた。

しかし、この番組を利用した授業では、生徒や学生諸君は、情緒的段階にとどまらず、少数民族問題やその言語や文化の保存や再生の意味を鋭く問うた。中学生がどう受け止めたかについては、すでにポーランドのクラクフで行った学会で発表しているので、ここでは大学生の声にふれたい。

森鴎外記念会の理事倉本幸弘さんは、大学で番組を使った授業を済ました後に、学生たちのレポートを送ってくれた。

何人かの学生は、留学したことで逆に母語への愛情がわいた自分の経験と重ね合わせて、少数民族の言語や文化の重要性をつづり、別の何人かは絶滅種トキの孵化や飼育、あるいは古い寺院や絵画の修復と比較して、保護の必要を論じた。しかし、ユーカラは本当に現代によみがえったのかの問いには、ほぼ全員が否定的だった。中にはたった一人であれ、その人を心から感動させたとしたら、それはそれでその瞬間だけでもよみがえったのであり、意味があったのだ、という意見もあったが、時の流れの中で少数者の文化が滅んでいくのは仕方ないことだ、その意味では真によみがえるということはあり得ないことだという点では、ほぼ全員が一致していた。しかし、ではどうするか、なにをすべきか、それらを可能にするためには国家と少数民族の関係はどうあらねばならぬのか、などについてまでは論じられたものはなかった。

森鴎外はピウスツキより４年早く生まれて４年長生きしたのだが、ピウスツキが西から東へ流刑される年より３年早く、ほとんど同じ航路を通って、東から西へ留学した。彼はすでにロシアには少数民族問題があることは知っていたらしいが、留学先のドイツのベルリンで、貧困層が多く住んでいた区域のある一家のお針子をしていたらしい娘と深い恋仲になりながら、彼女を捨てて帰国したことは、自身が書いた『舞姫』によって広く知られている。ピウスツキの帰国が祖国の独立であったように、鴎外の帰国は、日本が近代国家になるための大普請中だったゆえであることは、これも彼の『普請中』に読み取れる。帰国を促したのは、ピウスツキにあっては後のポーランド初代元帥になった実弟ユゼフだったが、鷗外でも元帥山縣有朋だった。

国家と民族というと、アメリカの反対で国連では国家として認められていない国パレスチナの出身で、米コロンビア大学の教授だったエドワード・サイードを思い出す。2000 年 1 月 3 日の朝日新聞でかれは記者に、自由貿易や市場主義では解決できない現実の格差こそが、人類の対決課題なのだとはっきり言い、グローバル化の中で、なぜ民族や宗教の違いにこだわる動きも強まっているかの問いには、文化の均質化から逃れようとしているからだ、民族や文化がまざりあい、自分はだれかという自画像がゆらいで、それが自分たちだけの郷愁の世界に帰りたいという心理につながり、過去の世界が心の避難所になっているのだ、と彼は答える。そしてさらに国家は市民の権利を守り国民に責任をもつために必要で、民族自決の主張も他の共同体や民族を破壊し滅ぼす権利はないと語ったうえで、文化の多様性を口にすることと、実際に異文化を持つ人々と共存することは別問題だとし、「我々はまだ真に共存するためのモデルがない。共存が何を意味しているかを、だれもしっかりと理解していない。」と言い切る。

学生諸君がそれ以上進めなかったのも仕方ないことだったのだろう。しかしサイードはそこにとどまらず、具体的提案を自分の夢として語った。

それは記憶の銀行をつくることです。世界には公共の図書館もない民族がたくさんいる。沈黙させられ、散逸した記憶を集めるのです。アメリカの先住民やアフリカから奴隷として来た人たちの記憶も重要です。パレスチナ人の記憶は仲間と収集を進めているところです。この記憶の銀行、記憶の博物館に、失われようとしている我々小さな民族の記憶を集め、だれもが利用できる共有の財産にしていくのです。実現すれば、地球の文化の本当の豊かさや歴史の多様性を知ることができる。それによっても、次の世紀の姿は変わるのです。

サイードはこう語っただけで亡くなってしまったが、彼の夢が実現すれば、おそらくピウスツキが録音したものも安住の地を得るだろう。しかし、ただそこに保管されるというだけではなく、それが利用されて、そこから文化の本当の豊かさや歴史の多様性を知ってもらうまでには、従来の図書館や博物館にはなかった科学技術と、世界のさまざまな国や民族の多くの人々の、そうしたいという熱意がからみあって、初めて可能になるもののような気がしてならない。あたかもこのプロジェクトがそうであったように。

＊ Author & title: T.Yamagishi, “‘Items and Matters’ That have been Resurrected and ‘Things and People’ That have Implemented Them.”